

語り手の不明瞭化 ——『アントーノフカのりんご』バリエントの比較——

加藤 敏

私の手元にブーニンの短編小説『アントーノフカのりんご Антоновские яблоки』の3つのバリエントがある。この短編小説をブーニンは自らの作品集が編まれるときに何度か書き換えている。大雑把に言ってしまうなら、書き換えるというよりも、以前のバリエントから一部を削除するという作業が行われていると表現した方がより正確である。ブーニンは1900年版を出発点として、機会があるごとに、そこから余計な贅肉を削ぎ取っているかのごとくである。この意味で最終的に残されたものがこの作品の精華であり、この異同を分析することにより、ブーニンが『アントーノフカのりんご』で何をどのように描こうとしたのかより明確になる可能性がある。

ところで3つのバリエントとは、この短編小説が1900年にペテルブルクで出されていた雑誌『生』の10月号に発表されたもの、1915年に出版されたブーニン全集に収録されたもの、そして1921年にプラハで出された作品集『はじまりの愛』に収められたものである¹。1921年以降ブーニン本人によってこの作品が書き換えられることはなかったようで、ブーニンの作品集が出版されるときには、最後のものが底本とされる。つまり最初に発表された1900年から最後の改訂が行われる1921年まで、およそ20年という年月が経ているわけである。この20年という時間をどう捉えるかによって、バリエントの異同の分析が2通りに行われる可能性が生じる。第一の考え方は20年という時間を積極的に捉えるものである。この20年の間にロシアにおいて世界史上に残る変革が生じているのであり、この変革を経験し、また自らも亡命を余儀なくされたブーニンの中に生じた変化が、かつての自らの作品を見る目に影響を与え、作品の改訂に向かわせたと仮定することができる。一方、第二の考え方は同じ20年を消極的に捉え、その間の歴史的な変化と、作品を見る作者の見方には本質的な関係はないとみなすそれである。これら2通りの考え方は、分析対象である作品が分析者にどちらかの立場に立つように指定するというよりも、分析対象とは独立して、分析者のとる立場によって自ずと選択されるものであろう。つまり、

¹ Бунин И. А. Антоновские яблоки. Картины из книги «Эпитафии» // Жизнь. № 10. СПб, 1900. С. 149-166; Бунин И. А. Антоновские яблоки // Полное собрание сочинений И. А. Бунина. Т. 2. Петроград, 1915. С. 163-177; Бунин И. А. Антоновские яблоки // Бунин И. А. Начальная любовь. Прага, 1921. С. 7-28. なお本稿においてこれらから引用を行う際には、1900年版をA、1915年版をB、1921年版をCと記し、これらの記号の後にページ数を示す。

研究の態度がブーニンという人に焦点を当て、伝記的な側面に関心がある場合は、第一の考え方がなされるわけであり、反対にテキストを重視する研究態度を採るならば、第二の考え方が選択されるわけである。私の立場は後者である。もっとも今回の分析に際しては、第一の考え方に則った場合、得られるものはあまりないように思われる。というのもブーニンは一貫して作品を削り取るという作業を行っているのであり、書き加えるということをほとんどしていない。もしかりに加筆と削除の双方が行われており、新しいバリエントでそれまでになかった状況が描かれたり、新しい形象が生まれたりしているのであるなら、第一の立場を採って分析しても成果が期待できるかもしれない。しかしブーニンが実際に行ったことは削り取ることである。これは芸術家としてのブーニンが芸術作品としての小説を純化してゆくプロセスと見る方がより自然である。というわけで約 20 年という時間が経る間に起こった社会的および個人的変化は、本稿においては無視することにする。

構造と批評

『アントーノフカのりんご』では、語り手が自らの幼年時代を回想するという枠組みの中で、相互に関連のないいくつかの場面が描写されている。小説は 4 章から成り、第 1 章から第 3 章までが主に回想で、一方、第 4 章では現在の情景が描かれている。当然のことながら語り手が 1 人称単数で示されるのに対し、回想の中の主人公——つまり幼年時代の語り手——およびその行動はほぼ一貫して 2 人称単数で示される。

ところで『アントーノフカのりんご』に対する研究や批評は、『村』や『アルセーニエフの生涯』などの代表作に比べると多くはなく、またあってもその内容は作品を過ぎ去ってしまった、あるいは過ぎ去りつつある過去に対する、あるいはもう少し限定して、地主貴族の生活に対するノスタルジーの表現とみなすのが一般的である¹。その指摘自体に誤りはない。しかし私はこの作品をノスタルジーの表現に限定することには異論がある。Бажинов が同様の異論を述べている。彼は一般的な意見を否定した後に、「生と存在の喜びを肯定し、世界の美と、人間が自然と融合する幸福を歌い上げること」を作品の「根本的な思想」としている²。しかし私は彼の考えにも完全には賛成できない。これについて私は別の機会に議論するつもりであるが、ここでは私の異議申し立ての根拠として、現在を描いた第 4 章の存在のみを挙げておく。もしかりに『アントーノフカのりんご』のテーマが過去のみであるなら、現在の描写を一つの独立した章とすることは不自然である。

¹ 例えば Афанасьев В. И. И. А. Бунин: Очерк творчества. М., 1966. С. 46-50; Кучеровский Н. М. И. Бунин и его проза. Тула, 1980. С. 55; 佐藤清郎『孤愁の文人——ノーベル賞作家ブーニン』法爾会, 1990 年, 280 頁。

² Бажинов И. Д. Рассказ И. А. Бунина «Антоновские яблоки» // Вопросы русской литературы. № 2 (14). Львов: Изд-во Львовского университета, 1970. С. 22-27.

言い換えるなら、この作品にノスタルジーの表現のみを見る者は、第4章を読み飛ばしているのである。Бажиновも同様に、彼が注目しているのは幸福な幼年時代が描かれている最初の3章のみであり、そこから自説の結論を導いている。私は第4章に適正な注意を向けることで、作品のより公正な理解が可能となると考える。しかしその理解を示すためにはさらに別の分析が必要であり、その作業はここでは差し控え、本稿ではその理解のための準備として、バリエーションの比較を通じ、作品の精華が結晶する過程を調べることによって、その理解に寄与しうる解釈を提示することを目指す。本稿は『アントーノフカのりんご』を理解するためのあくまでも準備作業である。

バリエーションの比較

それでは3つのバリエーションを具体的に比較、分析する。まず1900年版と1915年版との異同から見ることにする¹。

1900年版から削られた部分は主に第1章の前半に集中しており、またその部分を詳細に見ることで得られる結論を他の部分にも適用することができるので、この部分は特に丁寧にみることにする。

1915年版では、1900年版の冒頭第1段落全体および第2段落の約半分が削除されている。次の部分は1900年版の冒頭部分であり、1915年版では削除された部分である（なおテキストは旧正書法に則って書かれているが、本稿においては現在の正書法に則った表記法を用いることにする。以下においては断りがあるまで1900年版が示され、1915年版で削除されている部分に下線が施されている。修正の細部を日本語訳で示すのは困難なので、ロシア語の原文を挙げることにする）。

Антоновские яблоки... Где-то я читал, что Шиллер любил, чтобы в его комнате лежали яблоки: улежавшись, они своим запахом возбуждали в нем творческие настроения. Не знаю, насколько справедлив этот рассказ, но вполне понимаю его: известно, как сильно действуют на нас запахи... Есть вещи, которые прекрасны сами по себе, но больше всего потому, что они заставляют нас сильнее чувствовать жизнь. Красота природы, песня, музыка, колокола в

¹ ソビエト時代に出版されたブニン作品集のВ. Г. Титоваによる注を見ると、『アントーノフカのりんご』は1912年の作品集『峠』に収録される際にかんがりの改訂がなされ、それに1915年の全集出版の際にも若干の改訂が加えられているようである。これから見るものは厳密には『峠』出版の際に加えられた改訂である可能性が高い。しかし1912年のものと1915年のものの区別をつけることが重要であるようにも思われず、分析の結果に大きな問題が生じることもないであろうことが予想されるので、1912年版は検討の対象外とする。См.: Бунин И. А. Собрание сочинений в 9 томах. Т. 2. М., 1965. С. 504-508.

солнечное утро, запахи... Запахи особенно сильно действуют на нас, и между ними есть особенно здоровые и яркие: запах моря, запах леса, чернозема весною, прелой осенней листвы, улежавшихся яблок... чудный запах крепких антоновских яблок, сочных и всегда холодных, пахнущих слегка медом, а больше всего — осенней свежестью!

Садовники так и говорят про них: «осеннее яблочко, русское!» И я с удовольствием вспоминаю теперь эти слова. Много хороших деревенских впечатлений улетучилось за последнее время из моей души. Но порою достаточно какого-нибудь звука, лица, намека, чтобы прошлое сполна охватило меня. Иногда на базаре услышишь запах сена и сразу вспомнишь сенокосы, Петровки, жаркие летние дни, вечерние зори... Иногда пахнёт в окно вагона весенним ветром, сыростью земли — и сразу точно помолодеешь на несколько лет... Теперь на дворе <...> (引用 1, A: 149, B: 163)

上に引用した部分は 1915 年版では完全に削除されてしまっている。一方, 1900 年版でこれに続く部分は以下のとおりである。部分的な修正が多く施されているものの, 1915 年版ではこの部分は削除されずに残された。カギ括弧 [] 内に示されている字句や句読点は 1915 年版で加筆されたものである。

<...> осень [Осень], идут непрерывные дожди₁[;] на улице дребезжат извозничьи экипажи[.] и с гулом, с грохотом, с звонками катятся среди толпы тяжелые конки₂[;] а я по целым дням сижу [я] за работой, гляжу в окно[.] на мокрые вывески и серое небо, и все деревенское очень далеко от меня. Но по вечерам я читаю старых поэтов, родных мне по быту[.] и по многим своим настроениям [душе] и, наконец, просто [даже] по местности, — средней полосе России. А ящики моего письменного стола полны антоновскими яблоками, и здоровый осенний аромат их [— запах меда и осенней свежести —] переносит меня в деревню, в помещичьи усадьбы, настраивает на бодрый деревенский лад и рисует мне много картин, с которыми связаны мое детство и юность. Антоновские яблоки — главный фрукт наших садов, любимый осенний десерт в старосветских усадьбах. И вот передо мною проходит целый [в тот] мир, целый быт, который скудел, дробился, а теперь уже умирает [гибнет], так что, может быть, [о котором] через каких-нибудь пятьдесят лет его будут знать только по нашим рассказам... (引用 2, A: 149-150, B: 163)

文や単語レベルでの削除や修正, 語順や句読点の変更などは脇に置いておいて, まずは削除された冒頭部分 (引用 1) と削除されなかった部分 (引用 2) の違いについてここで立ち止まって考えてみたい。削除された部分とされなかった部分を比べたときに気づくこ

とは、前者が後者を一般化しているということである。冒頭の第1段落はシラーとりんごの香りについての逸話から始まり、美しいもの、特に香りが人に与える作用についての一般化された形の発言がなされ、続く第2段落では過去の村での生活が遠くへ消えてしまったこと、それでも香りという僅かなきっかけでその生活が思い出されることが語られている。つまり、この部分の要点は、香りが人に影響を与えるという語り手自身が見出した一般的事実である。それに対して、削除されなかった部分（引用2）では、現在の語り手の生活、語り手にとって完全に日常と呼ぶことができる情景が具体的に描かれている。今の季節が秋で、机に向かって仕事をしながら雨の降る窓の外の景色を眺め、また仕事の後には近しい詩人の詩を読み、そして——これが最も重要なことであろうが——アントーノフカのりんごの香りがきっかけとなって昔のことが思い出されるとされている。要するに、語り手の語っている内容は前者（引用1）の方が後者（引用2）よりも一般的あるいは抽象的であり、反対に言うと、後者の内容は前者のそれと比べた場合ずっと具体的であると言える。つまり、1915年版では語り手による一般化された説明が削除され、前置きなしでいきなり本題に入るという構成になっているのである。

次に引用2の中で削除された部分に目を向けることにする。まず大きく削られているため目を引くのが, *настраи́вает на бо́дрый <...> прохо́дит це́лый* までの部分（8-11行目）であろう。しかしこの部分の分析をする前に、いくつかの小さな修正に目を向けてみたい。具体的に言うと、それは *с зво́нками*（2行目）あるいは *в дере́вню*（8行目）である。この両者に共通することは、それぞれに類似した内容の表現が近くにあるということである。*с зво́нками* に関して言うなら、類似した内容の表現とは *с гу́лом, с гро́хотом*（2行目）であり、*в дере́вню* については *в поме́щи́чьи уса́дьбы*（8行目）である。つまり、*с зво́нками* および *в дере́вню* は1900年版では類似した内容の他の表現と並列的に置かれていたのであるが、1915年版では削除されているのである。このタイプの削除は他の個所でも頻繁に見られる。全く同じことを引用後半の, *ми́р*（11行目）と並列的に置かれている *це́лый бы́т*（11行目）にも言うことができる。

それでは先ほど後回しにしておいた *настраи́вает на бо́дрый <...> прохо́дит це́лый* の部分に目を向けてみることにする。前段落で触れた類似表現の削除がここでも見られると言える。つまり、(*здро́вый о́сенний аро́мат их*) *рисует мне мно́го карти́н, с кото́рыми связа́ны мое де́тство и юно́сть* という表現（9行目）と、その前にある *здро́вый о́сенний аро́мат их пере́носит меня́ в дере́вню, в поме́щи́чьи уса́дьбы* という表現（7-8行目）を比べると、これらの表現はともに、アントーノフカのりんごの香りがきっかけで「私」は昔を思い出すということを言っているのであり、内容的に同一であると言えるのである。つまり、類似表現の削除が単語レベルのみでなく、それよりも大きいレベルで行われている結果、*рисует мне <...> де́тство и юно́сть* の部分が削除されたと見るのが可能と

なるのである。同じく削除されている И вот передо мною проходит целый мир, целый быт という表現 (11 行目) にもまったく同じことを言うことができる。この表現の中身は前述の 2 つの表現のそれと同じであり、それゆえにこの表現は削除されてしまったとみなすことができる。

ところで Антоновские яблоки — главный фрукт наших садов, любимый осенний десерт в старосветских усадьбах の 1 文 (10-11 行目) が省略されたのは、引用 1 の部分がすっかり削られたのと同じ理由によると、つまり語り手による説明が削除されたと考えることもできるであろう。しかしそれとは別に次の事実もある。ブーニン は антоновские яблоки あるいは антоновка という語句の使用を 1915 年版 (および 1921 年版) では極力抑えているのである。1900 年版では антоновские яблоки が 11 回、антоновка が 4 回、合計 15 回テキスト中で使われていたのであるが、1915 年版ではそれぞれ 4 回、2 回で、合計 6 回 (1921 年版ではそれぞれ 3 回、2 回で、合計 5 回) にまでこれらの語句の使用が減らされている。これらの語句が現れる部分はことごとく削除の対象となっているのである。作品全体のライトモチーフである антоновские яблоки および антоновка という語句、およびそれらを含む部分が削除された理由は、これらの語句を多用することによって却ってこのりんごの印象が散漫になってしまい、これらの語句の作品中における重みが失われてしまっていると言作家により判断されたのではないかと思われる。ブーニンはこれらの語句の使用を重要な場面のみに抑えることで、反対にこのりんごの印象を強めようとしたと想像することができる¹。

ここまで述べたことをまとめると、暫定的に以下のように仮定することができる。つまり、1915 年版出版の際に 1900 年版に加えられた修正には 2 つの原則が見られ、第一の原則は語り手による抽象的、一般的な説明を削除するというものであり、第二の原則は並列的に置かれた類似する表現を削除するというものである、と。これらの原則のうち第二のものは文章内部の部分的な問題であり、またより一般的に言うなら、文章は簡潔でなければならないという文章作法の大原則に含まれるのであって、本稿では重要視する必要のないものである。一方、第一の原則は語り手の形象と関わるものであり、作品全体の構成や、作品全体の解釈とも関係してくる可能性のある重要な原則であるとみなすことができる。本稿では以下において、この第一の原則を中心に分析を進める。

ここで分析を先に進ませたいのであるが、その前にここまで引用した部分でまだ私たちが触れていない変更点を念のために見ておきたい。とはいっても、これまで触れられ

¹ настраивает на бодрый деревенский лад の部分 (8-9 行目) が削除された理由がうまく説明でない。唯一考えられる理由は、рисует мне <...> проходит целый の部分を削除し、これの前後の部分を一挙につなごうとするときに、настраивает на бодрый деревенский лад が邪魔であったということである。

ていない修正箇所には何か共通する傾向があるわけではなく、特に指摘すべきことがあるわけではない。ただし一つだけ触れておきたいことがある。それは引用 2 で [] 弧内に示されているとおり、アントーノフカのりんごの香りを запах меда и осенней свежести (7-8 行目) と表現していることである。この表現は、1915 年版では削られた冒頭第 1 段落末にあった запах <...> антоновских яблок <...>, пахнувших слегка медом, а больше всего — осенней свежестью (引用 1, 9-10 行目) を簡潔にしたものである。この表現をブーニンが気に入っていたようで、削除する部分に含まれていたものを、削除されない部分にわざわざ移しているのである¹。

それでは先に進むことにする。以降においては、あらゆる変更個所で立ち止まることはせず、何らかの特徴が見られる場合のみを検討の対象とする。

ところで語り手による説明が削除されるという原則を私たちは仮定したわけであるが、語り手によるあらゆる説明が削除されているわけではない。第 2 章においては語り手による説明が若干残されている。次の引用はその一つである。

Осень — пора престольных праздников, и народ в это время прибран, сыт и весел [доволен], так что вид деревни осенью совсем не тот, что в другую пору. Если же год урожайный[,] и на гумнах возвышается целый золотой город скирд, а на реке звонко и резко гогочут по утрам гуси, — так в деревне и совсем недурно [не плохо]. К тому же наши Выселки с покон [спокон] веку, еще со времени дедушки Аполлона Платоновича, славились «богатством». Старики и старухи жили в Выселках очень подолгу, — первый признак богатой деревни, — и были все высокие и белые, как лун. Только и слышишь, бывало: «Да, — вот Агафья восемьдесят три годочка отмахала!» — или даже разговор[ы] в таком роде: <...> (引用 3, А: 153, В: 166)

『アントーノフカノりんご』の第 1 章から第 3 章ではその大部分において、幼年時代の語り手が直接的に五つの感覚器官で感じ取ったことが記されるのであるが、それとは異なり、引用 3 の部分では村の様子が語り手により一般化された形で描かれている。これも一種の説明であり、語り手によるこのような説明は第 2 章には他にも何箇所かで残されたままになっている。第 1 章においても語り手による説明が完全に削除されているわけではないが、第 2 章においてはその傾向が強くなっている。その意味で第 1 章と第 2 章では語り方が若干異なっており、第 1 章では語り手による説明が最小限にとどめられ、その代わり幼年時代の語り手が直接的に五感で感じたことが書き留められているのに対し、第 2 章で

¹ ちなみに後で見るように、引用 2 の部分も 1921 年版で完全に削除されてしまうのであるが、この запах меда и осенней свежести という句だけは別のところに移されて 1921 年版でも保たれている (C: 7)。

は一般化された説明が最初に短く示され、そのあとに具体的な場面が描かれるという傾向がある。例えば引用 3 の後には、地主と老人の間に交わされた、老人の年齢に関する会話が具体的に直接話法で描かれている。しかし引用 1 における語り手による説明と、第 2 章におけるそれには決定的な違いがある。それは前者が語り手の意見であり、推測であり、解説、コメントであり、要するに語り手自身が自分の経験から導き出した結論であるのに対し、後者にはそういった要素は含まれていず、語り手による説明は客観的な事実として提示されているのである。そのため後者においては同じ説明であっても、語り手の主観性は感じられない。その意味で先ほど挙げた原則は、語り手による「主観的」説明と言い換えることができる。

さて第 3 章における変更点の中で注目すべきは、アルセーニー・セミョーヌイチについての語り手のコメントが削除されているということであろう。削除されたのは次の部分である。

В детстве я боялся его, как огня, но зато и любил его почти до обожания, особенно в те минуты, когда он, бывало, носится, как ветер, у нас по двору на своем «киргизе» и на всем скаку хватается с земли брошенный в воздух картуз. (引用 4, A: 159, B: 171)

この部分で語り手は自分の過去の内面を表にあらわしている（боялся, любил）。このように語り手が自分の過去を振り返って、当時の主観を表記しているのはこの部分だけである。この部分は現在の語り手が過去の自分自身の内面を説明しているという意味で、この部分の削除は語り手による説明を削除するという原則に沿ったものであるとすることができる。

また第 3 章にはもう一つ興味深い改訂がある。すでに触れたとおり、『アントーノフカのりんご』は第 1 章から第 3 章までが回想で、第 4 章が現在の村の描写となっているのであるが、第 3 章の末尾、つまり回想の最後の部分で 1900 年版にある次の 1 文が 1915 年版では削除されている。

Да разве могла эта сентиментальная жизнь, равно как и беспутное существование с охотами, с кутежами и пирами не погибнуть при первом столкновении с новой жизнью?.. (引用 5, A: 162, B: 174)

幼年時代の語り手は伯父たちと狩りをしながら見知らぬ地主の屋敷に泊まるのだが、語り手は寝過ごしてしまい、伯父たちが狩りに出て行ったあとに一人屋敷にとり残される。それで彼はその家の書斎に入り本棚をあさっているときに、ふと見るとその部屋には何人かの女性の肖像画が掛けられていて、その絵の中の人物と「私」の目が合うのである。上

の1文はそのときに生じる語り手の想いである。この1文は語り手による説明というわけではないが、この修辞疑問の内容が語り手に属し、語り手の主観が表現されていることは明らかであり、この1文を語り手による説明と同列のものとして扱うことが可能であるように思われる。

1915年版出版に際して第4章においては大きな変更は施されていない。削除された量によってまず目に付くのは次の部分である。これは作品の最後の部分であり、1900年版の『アントノフカのりんご』はこのことばで締めくくられているのである。

Но песня разрастается сама собою. И еще до сих пор звучит в ней прежняя удаль, теперь уже грустная и безнадежная, которая скоро и совсем замрет, а как далекий отзвук былого сохранится только в ней — в этой старой песне. (引用6, A: 166, B: 177)

初冬になり、かつてと同じように、小地主のもとに別の小地主たちが集まり、狩りに出かけようとしている。そのときに地主たちが誰からともなく歌を歌い始め、すると他の地主たちもそれを引き継いで歌いだす。そして最後に引用6が語り手によって述べられるのである。ここでまず注目したいのは、この部分に含まれている語のいくつかが、別の部分に移動されて1915年版でも残されたということである。次の引用7は引用6よりも少し前に現れる部分である。

Несколько голосов [И прочие] нескладно, прикидываясь, что они шутят, подхватывают последнюю фразу [с грустной безнадежной удалью]: <...> (引用7, A: 166, B: 177)

引用6と引用7を比べると、ブーニンが *грустная безнадежная удаль* という表現をどうしても残しておきたかったということがうかがえる。しかし私たちにとってより重要なことは、その *удаль* がまもなく消えてしまい、ただ歌の中にのみ過去を遠く響かせるこだまのように残るであろうという予想が語り手の口から述べられているということである。これは語り手の判断、推測であり、広い意味での語り手による説明に含まれるものである。

以上のように1915年版においては、文章を簡潔にするための部分的な修正以外に、語り手による説明の削除という大胆な修正が加えられているということが結論付けられるようである。しかしここでもう一度、削除された部分を見直し、より厳密にブーニンによる改訂の原則を規定することにする。改訂の原則を私は「語り手による説明の削除」としてきたが、ここでこの表現についてもう一度考えてみたい。大きく削除された引用1, 5および6に共通し、反対に削除されなかった引用3には見られないはずのものに、私は暫定的に「語り手による説明」という名を与えたが、その名は厳密には不適當である。何故ならそれは削除されていない引用3にも当てはまってしまう。そこで私は今まで用いてき

ものの代わりに、「語り手の主観の表現」という表現を用いることにする。こちらの方がその規定から引用 3 が除外されるという理由で、また語り手の想いや予想である引用 5 および 6 を規定する表現として「説明」よりも適当であるという理由で、より厳密に改訂に際して削除されたものを規定することができるように思われる。ところで多少複雑なのが引用 4 である。引用 1, 5 および 6 が現在の語り手の主観が表現されたものであるのに対し、引用 4 は幼年時代の自分自身の伯父に対する感情を現在の語り手が語っているものである。つまり引用 4 の内容は、幼年時代の語り手の主観の表現であり、広い意味では語り手の主観の表現ということになり、削除の対象となっているわけであるが、引用 1, 5 および 6 とは異なった特徴を備えている。

それでは 1921 年版において加えられた修正を見てみることにする。こちらでも大胆な削除が繰り返されている。今回は段落レベルで行われた削除が 2 箇所である。最初が第 1 章の冒頭部分である。1915 年版では 1900 年版から最初の 1 段落全体とその次の段落の約半部分が削られたことをすでに見たが、1921 年版ではそのときには残された部分、つまり引用 2 の全体が削除されている。

もう一つは第 4 章における削除である。この作品は 1915 年版では 15 ページにわたって印刷されているのであるが、そのうちの 1 ページ以上がまとめて 1921 年版では削られている。それが引用 8 である。以下において引用は 1915 年版からなされており、1921 年版で削除された部分には点線を付し、加えられた部分は二重のカギ括弧 [[]] で示すことにする。

Запах антоновских яблок исчезает из помещичьих усадеб. Эти дни были так недавно, а между тем мне кажется, что с тех пор прошло чуть не целое столетие. Перемерли старики в Выселках, умерла Анна Герасимовна, застрелился Арсений Семеныч... И вот я уже пишу им эпитафии.

Я надолго покинул родные «палестины», как любят говорить у нас, а когда недавно заглянул в них, невесело встретили меня они. Старые книги, старые портреты, разрозненные и никому ненужные, затерялись по городам, по мешанским хуторкам, по ястребиным гнездам новых помещиков, — гнездам, на которые раздробились прежние поместья. На весь наш уезд приходится теперь три-четыре состоятельных дворянина, но и они живут в деревне уже новою жизнью, — чаще всего только летом. Наступает царство мелкопоместных, обедневших до нищенства,[[.]] и чахнувших серых деревушек. Идет ноябрь, глухая пора деревенской жизни. [[Но хороша и эта нищенская мелкопоместная жизнь!]]

Скверно было утро, когда я покинул поезд на нашем полустанке, затерянном среди полей. И поля после долгой городской жизни показались мне мучительно убогими и скучными, когда мужик под дождем потащил меня на телеге к старой нашей усадьбе... Деревушки над лощинами

кажутся издали кучами навоза. В лесу, — голом, мокрым и черном, — синеватый туман и шумит сырой ветер, а на проселочной дороге — пустынно, как в киргизской степи. Навстречу попалась свадьба, — три телеги с бабами, покрывшимися от дождя армяками и подолами верхних юбок. Бабы кричат пьяными голосами песни, стараясь возбудить в себе удалство и веселость. Одна стоит среди телеги, машет платком, с криками погоняет веревочными вожжами лошадь, но лошадь неловко тычет ногами, колокольчики звенят вразбивку, телега не в лад стучит по дороге, удалая песня выходит фальшивой... Слава Богу, показываются более подходящие к этому серому дню фигуры. Едет кабатчик, возвращаясь из города с винными ящиками, в которых тяжело бултыхается в штофах зеленая влага, прокатил на дрожках, весь закиданный грязью из-под колес, урядник, а за ним в тележке поп. рослый, рыжий, в большой шапке и в тулупе с поднятым воротником, который повязан полотенцем, свернутым в жгут на груди и завязанным на спине в узел... А вот из-за бугра, сбегающего к ложине, показываются и деревья нашего сада...

Однако первым впечатлениям не следует доверять. Проходит два-три дня, погода меняется, становится свежей, и усадьба и деревня начинают казаться иными. Начинаешь улавливать связь между прежней жизнью и теперешней, и то, что вспомнилось мне при запахе антоновских яблок, — здоровье, простота и домовитость деревенской жизни, — снова проступает и в новых впечатлениях. Прошло почти пятнадцать лет, многое изменилось кругом, но я опять чувствую себя дома почти так же, как пятнадцать лет тому назад: по-юношески грустно, по-юношески бодро. И мне хорошо среди этой сиротеющей и смиряющейся деревенской жизни. (引用 8, В: 174-175, С: 24-25)

上の削除された部分では、最初に語り手が生まれ故郷を離れていたこと、そして最近そこを訪ねたことが書かれ、さらに現在の地主屋敷一般がどのような状態にあるか説明されている。次に久しぶりに村の屋敷を訪れた語り手が実際に見たものと、そこから受けた印象が語られている。村に降り立った日に受けた印象はひどいものであったが、やがては過去と現在のつながりが見えてきて、語り手の印象は好転している。

さて引用 2 および引用 8 の共通点がどこにあるか検討する必要がある。それは語り手に関する事実が語られているということである。引用 2 では語り手の仕事場の様子といった日常が、引用 8 では語り手が長いあいだ故郷を離れて、久しぶりに帰郷したということや、そのときに語り手が受けた印象、またその印象の変化が書かれているのである。一言で言うなら、これらの部分では語り手の具体的な形象を作り上げる要素が描かれているわけである。

とはいうものの、ここで削られている部分の中には、語り手の形象とは無関係であるように思われるものもある。まず Старые книги <...> только летом の部分では（第 2 段落 2-6

行目),すでに触れたとおり,現在の村の様子が説明されているわけであり,この部分は語り手の形象とは無関係である。この部分が削除された理由は,どうやら別の点にあるようである。すでに示した引用5の中に *новая жизнь* という表現がある。この *новая жизнь* は同じ部分にある,地主貴族たちの *сентиментальная жизнь* と対立させられている。また本稿のテーマと直接的な関係が見出されないため触れられていなかったが,1900年版にはあったものの1915年版ですでに削られてしまっている部分に,電報用の電信柱について語られている部分がある(A:155, B:168)。1900年版においてその電信柱のことを指して語り手は,それだけが「昔かたぎの *старосветский*」の美しい地主屋敷を取り囲むすべてのものと際立ったコントラストを成していたと語っている。つまり地主屋敷が古い生であるなら,その電信柱は新しい生であるということになる¹。この事情を引用5における *сентиментальная жизнь* と *новая жизнь* の対立と考え合わせるとき,語り手の念頭には,地主貴族社会が「古い」生であり,それに対し何か「新しい」生が生まれつつあるという対立図式があったことがわかる。そしてこの対立図式を表現している部分が,1915年版(および1921年版)において削除されているのである。引用8では *Старые книги <...> только летом* の部分も削除されているわけであるが,まさにこの部分で古い生と新しい生の対立図式が表現されている(*старые книги, старые портреты, прежние поместья :: новые помещики, новая жизнь*)。このように考えると,引用8の *Старые книги <...> только летом* の部分が削られているのも,語り手の念頭に置かれていたと仮定される対立図式を表現している部分を削除する作業の一環であるとみなすことができる。

一方,引用8の3段落目の大部分は,語り手の形象とは無関係とも思える村の描写である。結婚式における村の女たちの振る舞いや,居酒屋の主,警官,神父たちの登場は,語り手の形象とは無関係である。しかしこれらの情景は実は語り手の形象と密接な関係にあるとすることができる。というのも語り手が都市生活者であることが同じ段落の初めで語られているわけであるが(2行目),村は都市の生活に慣れた語り手に否定的な印象を与えたわけであり,それで村の情景描写も否定的な色調を帯びている。つまり,陰鬱とも言える村の情景描写は,語り手のメンタリティーが村と遭遇したときに生じた語り手の気分を反映しているのであり,この意味で語り手の具体的形象がなくなれば,必然的に村の情景描写も削除されるものなのであって,引用8の部分において語り手の形象を形成する諸要素を削除しようとする,同時に村の情景描写も削られることになるのである。

ところで語り手の形象との関連でついでに言うと,1921年版では回想される場面と現在の間の年月を示す語が,すっかり削り取られている。引用8の最後に15年という数字

¹ この新しい生を *Афанасьев* は資本主義であるとしている。*Афанасьев В. И. И. А. Бунин: Очерк творчества*. С. 50.

が出てくるが（下から 3-4 行目）、その他にも第 3 章の初めで 1900 年版および 1915 年版にある「約 20 年前」という数字が 1921 年版では「かつて」に置き換えられている（A: 157, B: 169, C: 17）。これらの数字は語り手の年齢を推定しようとするときに重要な手掛かりとなるものであるが、1921 年版では削られてしまっているため、語り手の年齢が完全に不明確になるという結果になっている。

もっとも第 4 章において現在の語り手の見る光景やさらにはその行動が完全に削除されているわけではない。引用 8 に続く部分では、語り手の村での生活を記述するために、1 つの段落が割かれている。ちなみにその最後で小地主が「私」のところに現れ、私を自分の屋敷へと連れて行き、その後はその小地主の日常が描写される。

[[Вот я вижу себя снова в деревне, глубокой осенью.]] Дни стоят синеватые, пасмурные. Утром я сажусь в седло и с одной собакой, и с ружьем и с рогом уезжаю в поле. <...> Там светло илюдно: девки рубят капусту, мелькают сечки, я слушаю их дробный, дружный стук и дружные, печально-веселые деревенские песни... Иногда вечером заедет какой-нибудь мелкопоместный сосед и надолго увезет меня к себе... Хороша и мелкопоместная жизнь! (引用 9, B: 175, C: 25)

以上をまとめると、1921 年版においては語り手の形象の具体性を失わせる方向で改訂が行われているとすることができる。語り手が今どのような仕事をしているのか、どこに住んで、どのような生活をしているのか、さらにはその年齢がどのくらいなのかといったことが、1921 年版ではわからなくなっているのである。

このように見てくると、1915 年版では語り手の主観の表現が削られ、さらに 1921 年版では語り手の具体性まで削られているということがわかる。その結果、残されたテキストには語り手の形象を上げるための諸要素が失われ、語り手の形象が主観的および客観的両面において曖昧、不明瞭になっているのである。これが『アントーノフカのりんご』の純化のプロセスであり、1900 年版から以上のプロセスを経て得られた 1921 年版が精華としての『アントーノフカのりんご』であると言える。

考察

それでは何故ブーニンが語り手の形象を曖昧にしたのであろうか。改訂において繰り返された削除は何に向かっていたのであろうか。私はここで思い切って、次の解釈を提出したい。それは、第 4 章に登場する「小地主」とは語り手自身であるというものである。そう解釈すると、改訂時に行われた語り手の不明瞭化はこの解釈を可能にすることに向けられていたと考えることができる。言い換えると、語り手の形象が明確である 1900 年版では、語り手と小地主は明らかに別人であるように読めるのであるが、語り手の形象が主観

的および客観的両側面において曖昧にされた 1921 年版では、語り手に特定の特徴が付与されていないゆえに、語り手と小地主を同一視する可能性が開けてくるわけである。

『アントーノフカのりんご』の第 1 章から第 3 章において主人公は幼年時代の語り手である。これらの章では幼年時代の語り手が移動する点となり（幼年時代の語り手はほぼ一貫して 2 人称単数で示され、外見に関する描写は一切ない）、移動しながら五感で感じたものが記されてゆくのである。それに対し第 4 章は、現在の村が描写されている。1921 年版に関して言うなら、第 4 章で語り手の村における日常を描写するために 1 つの段落が割かれている（引用 9）。これは 1921 年版の行数で数えると 28 行であり、第 4 章全体が 125 行なので、この 1 段落が第 4 章に占める割合は約 22%、5 分の 1 である。つまり第 4 章においても、この部分の主人公は語り手自身である。ところがこの部分以外、第 4 章は、同章への導入部分（引用 8）を除いたすべてが「小地主」の日常生活の記述に当てられているのである（88 行、約 70%）。要するに『アントーノフカのりんご』は第 1 章から第 3 章まで幼年時代の語り手が主人公であり、第 4 章の初めは現在の語り手が中心人物になっているのであるが、つまり第 4 章の途中まで語り手が主役であったのであるが、最後になって第三者が現れ、そのまま作品は終わってしまうのである。作品の統一性という点から考えると、これはあまりにも不均衡である。しかしもし最後に現れる「小地主」が語り手であるとみなすことが許されるなら、この不均衡は一挙に解消する。

私は「小地主」を語り手とみなすと解釈するが、実のところこの同一性を強く主張するつもりは全くない。「小地主」の属している社会集団と、語り手が属している（あるいは属していた）社会集団は同じ地主貴族階級である。また語り手と「小地主」の社会的な意味での同一性を示す証拠として、第 1 章で幼年時代の語り手は барчук と呼びかけられているが（A: 152, B: 165, C: 10）、第 4 章で「小地主」は何度か барин と表記されていることを挙げることもできよう（A: 164-166, B: 176-177, C: 26-27）。同一の社会集団に属しているということだけで、語り手と小地主のある種の部分的同一性が保証されていると考えてもよいように思われるのである。

それでは何故、作品の最後に「小地主」が登場しなければならなかったのであろうか。これは『アントーノフカのりんご』における別の特徴——人称形態の用法——と密接に関係があるように思われるのであるが、これについては精華としての作品をさらに別の視点から分析する必要がある、別の機会に検討する予定である。

Затуманенный образ рассказчика: Сравнительный анализ трех вариантов рассказа И. А. Бунина «Антоновские яблоки»

КАТО Сатоси

И. А. Бунин при издании сборников своих произведений исправлял свой рассказ «Антоновские яблоки» несколько раз. При этом он занимался главным образом сокращением текста, т. е. редко добавлял к тексту нечто новое. Можно сказать, что ход этих достаточно многочисленных исправлений являлся процессом очищения рассказа, а последний его вариант представляет собой квинтэссенцию произведения. Из этого следует, что сравнительный анализ вариантов рассказа может приблизить нас к раскрытию сути произведения.

Вообще об «Антоновских яблоках» говорится, что это произведение — «эпитафия» прошлому или уходящему в прошлое дворянству. Такое понимание, однако, упускает из виду последнюю четвертую главу, в которой рисуются картины современной рассказчику деревни. Мы считаем, что обращение должного внимания на четвертую главу даст более верное понимание произведения, хотя дать это понимание здесь невозможно, потому что для этого требуется дополнительный анализ. В данной статье мы сравниваем варианты рассказа, полагая, что полученные в ней выводы внесут вклад в полноценное понимание рассказа «Антоновские яблоки».

Мы располагаем тремя вариантами рассказа: первый опубликован в журнале «Жизнь» (1900 г.); второй — в «Полном собрании сочинений И. А. Бунина» (1915 г.); третий — в сборнике «Начальная любовь» (1921 г.). Сравнительный анализ этих вариантов показывает следующее. В варианте 1915 года сокращены выражения субъективности (субъективных суждений, субъективных мнений и т. д.) рассказчика, а в варианте 1921 года сокращены места, конкретно описывающие повседневный быт рассказчика. В результате всех этих сокращений получилось, что в последнем варианте образ рассказчика оказался туманным, неявным.

Что это означает? Чтобы ответить на этот вопрос, нужно посмотреть на конструкцию произведения в целом. Рассказ состоит из четырех глав. Первые три относятся к описанию картин деревни в детские годы рассказчика. В этих главах он вспоминает свои детские дни, проведенные в деревне. Четвертая же глава, как уже сказано, посвящена описанию современной рассказчику деревни, в особенности повседневного быта одного

«мелкопоместного», который появляется в середине этой главы. Такова конструкция произведения. Появление «мелкопоместного» немного неожиданно, так как с самого начала до его появления в последней главе героем рассказа всегда являлся сам рассказчик. Имея в виду все это, т. е. затуманенный образ рассказчика, конструкцию произведения, а также неожиданное появление «мелкопоместного» в конце рассказа, — естественно отождествить «мелкопоместного» с самим рассказчиком. При этом мы не настаиваем на полном их отождествлении. Оба они принадлежат к одному и тому же сословию — дворянству. Даже такого частичного отождествления достаточно, чтобы понять произведение по-новому, более адекватно замыслу автора. Показать новое понимание этого произведения — наша следующая задача.